

けれど、帝人に対してはあの日、スーパーで出会って数時間後には完全に心を許していたことになる。

セルティの友人と言うことも理由の一つだろうが、結局のところ、自分は彼に魅了されていた、ということかもしれない。

もしも帝人が同居を了解してくれたら。そうしたら、そろそろ帰る時間だと時計を気にして気落ちすることもなくなる。たかだか八畳の部屋を広く、もの寂しく感じることも。

家賃も食費も帝人が払う必要はないし、静雄の家からでも来良学園ならば少し遠いが徒歩圏内だ。

(竜ヶ峰にとつても悪い話じゃねえよな?)

もしかしたら願ってくれるかもしれない。けれど、願いてくれなかった場合、自分はかなり落ち込むような気がした。

そんなことを考えているうちに到着する。鍵穴に鍵を差し込み、ドアノブをくるりとまわした。すると台所に立っている帝人が振り返る。

「お帰りなさい、静雄さん」

「ああ、……お前、それ、どうしたっ!」

顔を見て仰天した。腫らしていて、いかにも誰かに殴られました、という形相だ。痛々しいことこの上ない。

「ちよつと、街で絡まれちゃいました」

言って、帝人は苦笑を浮かべる。夕飯の材料を買いに出かけたところ、カツアゲにあった結果なのだという。

「あ、でも預かったお金は無事です。自分の財布見せましたから!」

静雄から夕飯代にと預かった金は靴しまつてあったから無事だと笑顔で告げる。そして帝人の財布はいえ、ほとんど残金がない。それを見せた結果、今の顔になつてしまった、ということらしい。

「どんな奴だ」

「言いません。静雄さん、今、ちよつと怒ってますよね」

「ちよつとどころじゃねえ」

何しろそのカツアゲ犯はよりによつて帝人を脅して、しかも殴つたのだ。怒らないはずがない。

もしも静雄がその場に遭遇していたら、二度と池袋には行かない、と心に誓うまでぼこつただろう。……手加減でさなかつた場合死ぬかもしれないが、この場合は仕方ない。何しろ帝人を殴つたのだから、何をされても文句は言えない。言わせない。

「……余計言えませんが。今の静雄さん、人殺しになりかねない顔してますよ?」

「別にかまわねえ」

「僕がかまいます。落ち着いてください。その、元々僕はどうも絡まれやすいみたいで、時々あることですし」

そもそも、静雄とこうして日々を過ごすきつかけとなつた大貧民状態もカツアゲで巻き上げられた結果なのだと帝人は言う。そのときはそれなりの金額を持っていたので怪我はしなかつたが、『それなりの金額』はすべて失つた。